第 23 回 AAF 戯曲賞選評

平塚直隆

個人的に大変思い入れのある AAF 戯曲賞の審査員をやらせていただき、身の引き締まる思いで、二次審査から 25 本読ませていただきました。最終審査には『落ちる』が◎、『良いキャンペーン』『いみいみ』を〇の立場で臨みました。『落ちる』は、溢れんばかりの言葉の波状攻撃に圧倒されました。冒頭の劇作家の挨拶から続く、言葉の連想で引っ張られてくるシーン、そのひとつひとつに笑い転げました。その笑いは登場人物達の情けなさ、どうしようもなさから来る文句で、その文句があまりにも執拗で、終わりそうにもないから擁護する気が失せる、という笑いだ。確かにずーっと自虐で、演劇の内輪ネタだったので、広がりが薄く感じて勿体ないとは思ったが、主人公が劇作家の話だし、作者自身の気持ちの表れだから仕方がない。このダメな暮らしはいつまで続くのか、と言いつつ何がダメかはわからない。金なのか名声なのか、とにかく他の人と比べて明らかにダメな感じがする。その原因のひとつは、俺が劇作家だからだ。いつまで演劇をやり続けるのか、他に仕事を探した方がいいのではないか。かと言ってすぐに見つからないし、演劇以外にやりたいことも無いし、ぐるぐるぐるぐる考えているようでそこまでちゃんと考えていないのだけど、確実に落ちていっている。もう底辺だと思っていたのに落ちていく。そういう作者の想いが言葉になって溢れ、書かずにはいられない、そんな執念のような作劇に僕は物凄く惹かれました。常軌を逸したエネルギーを注ぎこまないと人には伝わらない、というのを体感した読後感でした。『良いキャンペーン』はまず会話の上手さに惹かれました。三人の女性の会話が自然体で、だからこそあちらこちらへ話題が飛ぶが、それを全部回想シーンに起こしていくというのが面白い。しかもシームレスに。俳優もやりがいがあるだろうと感じるし、混乱をきたさないように演出するのも腕が鳴りそう。そしてとにかく世界観が素敵だった。世界が閉じていく人物が出て来る話なのに、終わりに向けてなぜかどんどん世界が広がっていく感覚を覚えた。なんなら世界がすべて透き通っているようにも感じた。うなぎを焼いた時の匂いや音など五感に訴える説明も上手いし、それら感覚が最終的に体感にまで持っていくのは見事。『いみいみ』は言葉の洗練度とアイデアに脱帽しました。昨今はお米も洗いすぎると美味しくないと言われますが、この戯曲は米粒の大きさまで揃えるように台詞を精査したんじゃなかろうか、という言葉の数々で、ひとつも削る箇所がない。意味の無いただの言葉から、私の見た、感じた、個人的な意味のある言葉に変わっていく体験が面白い。ただ一点、無意味から意味にひっくり返る、その瞬間が、一瞬でがらっと変わったように感じたのが残念だった。しかもそれも、演劇という世界を使って、だったのでここで僕は距離

を置いてしまった。これを面白いアイデアだと感じる人も多いとは思うが、僕個人としては、小さく、そしてなんだか、別世界に行ってしまったと感じた。寂しくも感じた。『いみいみ』は、『落ちる』とは対照的にとてもきれいな戯曲だった。『落ちる』は地面をのたうちまわって泥だらけのような戯曲だった。僕もまだまだのたうちまわっていたいので『落ちる』を一番に推したのだが、『いみいみ』の受賞には異論はない。『Fusion,（フュージョン、）』に関しては、世界の狭さが気になった。この作品も、落ちて、閉じて、いくのだが、その先に解放を感じない。この上演を観たとして、どう感じたらいいのかがわからなかった。その閉塞感に意味がある、のかもしれない。しかし僕には、彼らがいま持っている他人の温もりや繋がりや居場所の方が大きく、逆に閉塞感を実感しきれなかった。気持ちの穴を埋め合って、そうであればあるほど外の世界が重くのしかかり、だからまた彼ら彼女らは繋がり合い、ぎゅーーっとくっついて、融合（フュージョン）してしまうまで、潰される、そんな世界もあるのかもしれないが、僕は読みながら、頼むから早くその部屋を出てくれ！と願っていた。『Plant』に関しては、台詞の説明的な部分と設定の甘さが気になった。書きながら、声に出し、演じてみる。そして、自分がその場にいたらまずどうするか、何を感じ何を思うか。その場の匂い、気温、相手がいたらその距離、体温、音、それらをイメージする。チップを身体に埋めて気持ちを探るというアイデアを通して、身体を使って書く、ということができれば、この戯曲はより説得力が増すのではないか。などとまあ偉そうに書かせて頂きましたが、僕も AAF 戯曲賞の受賞者としてより一層精進致します。